



三田ふるさと学習館

# 三田の古代 新着展示物

歴ネットさんだ考古部会



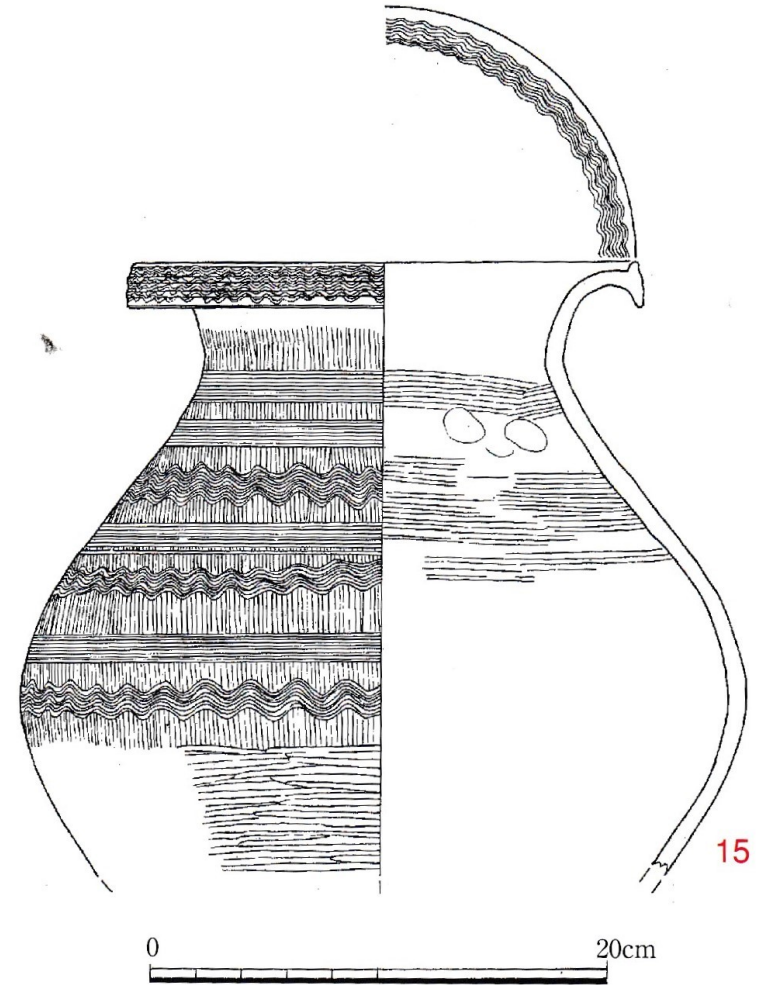
# 新しい資料が入りました！

上野ヶ原古墳出土の装飾須恵器3点にかわり、新しい資料を展示しました。  
展示された遺物は、全て本物です。  
来館して実際の色や質感を、ご自分で体感していただけたら幸いです。

# 弥生土器

- 弥生町遺跡（東京都文京区弥生）で1884年に最初に発見された軟質素焼きの土器
- 「縄文土器と比べると形・装飾が簡素で、高温で焼かれて明るく硬い」といわれるが一概には言えず、地域ごとに個性豊かに発達したとされる
- 先の縄文土器や後の土師器との区別も不明確で、その線引きは研究者の間でも一致していない
- 狩猟社会から農耕社会に変化する過程で、在来土器に朝鮮半島の無文土器の製作技術や彩文手法を取り入れて成立したとする説が有力

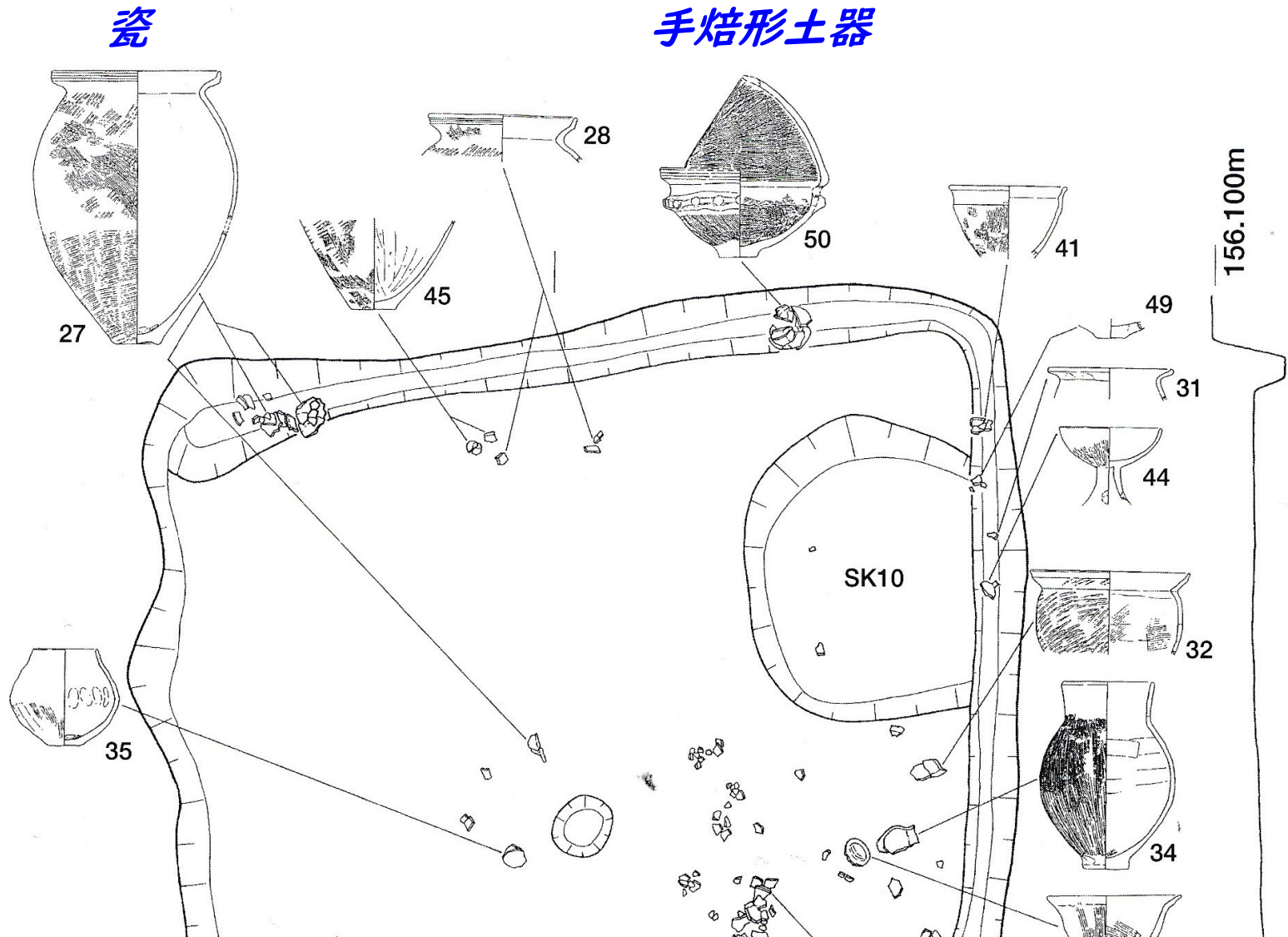
天神遺跡の環濠から出土（弥生時代中期）  
広口壺（ひろぐちつぼ）



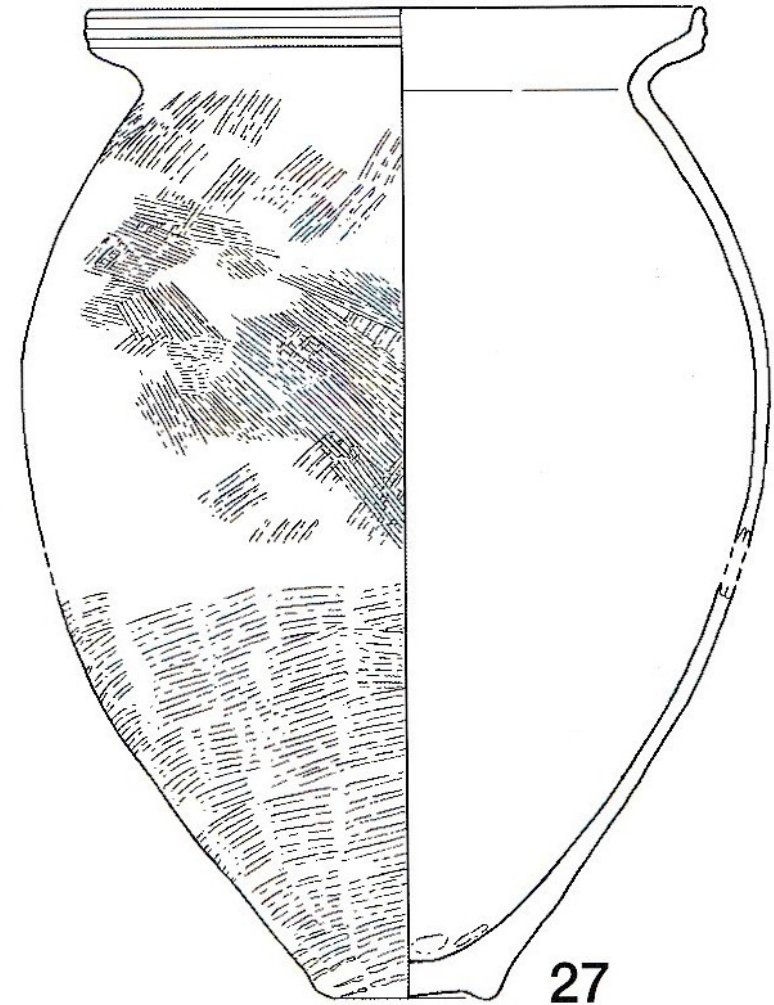
# 広口壺

- この壺は**天神遺跡**の**環濠**の中から出土しました
- 天神遺跡は三田盆地を代表する**弥生時代中期**（約2200年前）の**環濠集落**として有名な遺跡です
- 環濠集落とは、まわりに**濠**を巡らした集落のことで、この濠は**自衛的な機能**だと考えられています
- 胴体部分の**最大部**は、**真ん中よりやや下**に位置しており、口の部分の直径は21.6cm、高さは26.4cm、胴部最大径は31.4cmあります
- **口のふち**は**ななめ上方**へ立ち上がる太い頸部より上のはしで曲がり、**水平近くひら**いています
- 端の部分は上下方向に広がり、外端部は幅が広くなっています

# 三輪宮ノ越遺跡（弥生時代後期） 住居跡から発見された遺物



# 土師器への移行期の弥生土器 甕（かめ）



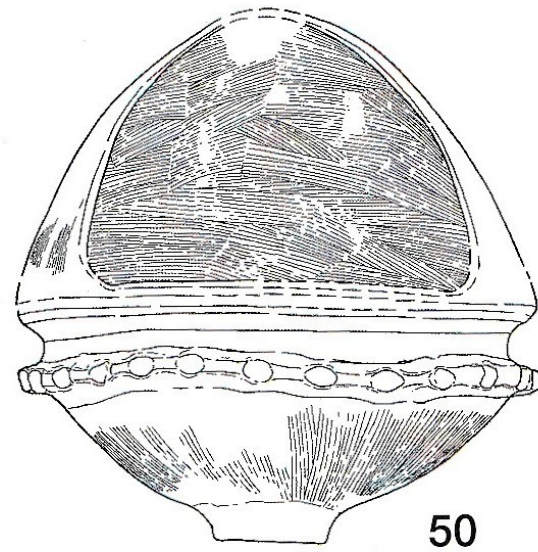
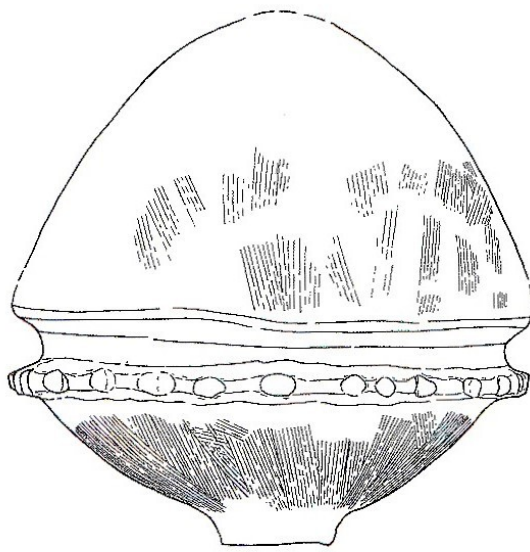
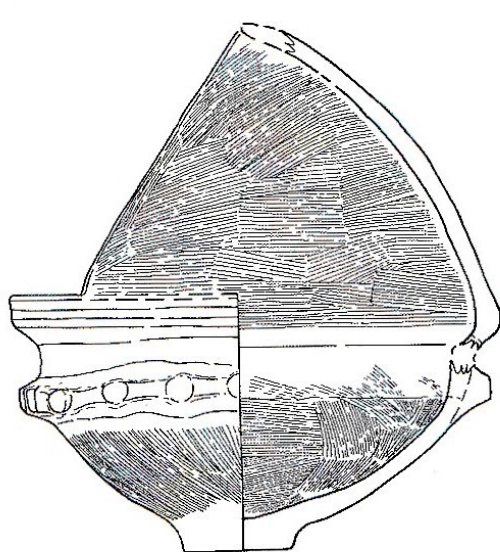
27

# 甕

- この弥生土器は「甕（かめ）」で、三輪・宮ノ越遺跡の竪穴住居跡でみつかった北近畿系の土器です
- 近畿地方の土器様式では、弥生時代Ⅴ期後葉～庄内式併行期（約1800年前）にあたると思われます
- 復元すると、外見は卵球形で、口の部分の直径16cm、高さ26cm、胴部の最大径は19.6cmありました
- 胴部の最大径が真ん中よりやや上にあり、底の部分は小さく平底になっています
- 底の形が尖りぎみなのは、煮炊きの時に土器を台のようなものに載せて浮かし、土器の真下で火を炊いたことを示しています
- 弥生時代の平底から古墳時代の丸底へという、移り変わりの中間の特徴を示していると考えられます



# 用途不明の弥生土器 手焙形土器（てあぶりがたどき）



# 手焙形土器

- この弥生土器は手焙形土器（てあぶりがたどき）と呼ばれ、**三輪・宮ノ越遺跡の住居跡**で見つかりました
- 突帯径17.4cm、器高17.5cm、底径3.7cmで、手焙（手を暖める小型の火鉢）形と名付けられていますが、どのように使われていたかはよく分かっていません
- 今のところ、**火を焚くような祭祀の道具**であったと考えられています
- 三田では**2例目**の発見で、住居内に**保管**されていたような状況で出土し、復元してみると**完全な形**でした
- このことからこの住居には、**祭りの中心となる人物**が住んでいたのではないかと考えられています

# 須恵器

- 古墳時代～平安時代に日本で生産された青灰色・硬質の土器で、赤褐色・軟質の土師器と区別される
- 轆轤技術を用いて成形し、窖窯（登り窯）を用いて1100度以上の高温で還元焼成されている
- 5世紀前半に百済から伽倻を通じて生産技術が伝えられた
- やがてヤマト王権の管理のもとで、製品の規格化がすすんだと考えられている
- 古墳時代の須恵器は、初めは古墳からの出土に限られるが、普及が進んだ後期になると西日本では集落からも出土するようになる
- 西日本では須恵器、東日本では土師器が優勢という違いが見られる

# 土鈴のような音がする須恵器 鈴器台付甗(はそう)



写真 134 奈良山古墳群第7号墳出土  
鈴器台付甗

# 鈴器台付臬

- この須恵器は奈良山7号墳（7世紀後半・古墳時代後期）から出土したものです
- 器台と臬（はそう）をつなぎ、器台内に土玉が3個入っていて、振ると土鈴のような音がします
- 全国的にも珍しいもので、葬式などの儀式で重要な役割をはたしたと考えられています
- 臬は、胴の部分に小さな穴があいたお酒などをそそぐ須恵器で、節（ふし）をのぞいたストロー状の竹を穴にさして使っていたと思われます
- 同じ場所からは提瓶も4個出土しており、このことから、臬と提瓶はセットで使われていたと考えられています
- どのような儀式だったかのヒントになりそうですが、今のところまだよく分かっていません

# 4個の提瓶と一緒に出土



三田市最大（兵庫県では2番目）  
提瓶（ていへい）



# 上野ヶ原古墳（古墳時代後期）出土 土器群





# 提瓶

- ここに展示されている須恵器は、**上野ヶ原古墳**から出土した**三田市でもっとも大きな**（高さ約34cm、幅約30cm）の提瓶（ていへい）です
- 三田市内では**15ヶ所の遺跡**から**36個**出土しており、兵庫県内でもたくさん見つかる地域と言えるようです
- 提瓶は今から1500年前（古墳時代）に作られた、酒などの**液体を入れる**須恵器だと考えられており、古墳時代が終わるとともに作られなくなりました
- 特徴のある形から「**古代の水筒**」といわれていましたが、**大きさ**や**肩の突起**（双耳）の形などをあわせて考えると、全ての提瓶が水筒のように使われたとも思えません。
- 実際に使われたものか、あくまで**象徴的**なものだったのかも、いまのところははっきりしないようです

# 三田市最大と最小

提瓶の親子？



上野ヶ原古墳・東家地古墳（三田市）

# 水筒にしては大きすぎる？



すいとう  
水筒のように使っていたのかな？

いかがだったでしょうか？

興味がわきましたら、ぜひ「三田ふるさと学習館」におこしく下さい。これ以外にも、多数の遺物を展示しております。